高知県立足摺海洋館あり方検討委員会・最終とりまとめ

1.足摺海洋館の概要

沿革

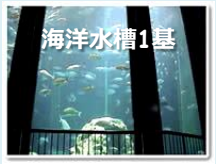
昭和47年11月10日、足摺宇和海国定公園が国立公園に昇格したことを契機に、竜串地域の海洋に関係する観光施設を包含する「海洋学園構想」を策定し、この構想の一環として昭和50年5月2日に足摺海洋館がオープン。

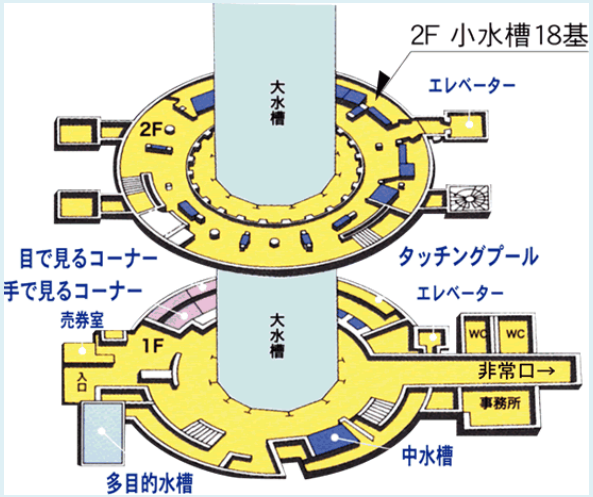
特徴

「土佐の海と黒潮の魚たち」をメインテーマに、土佐清水市及び大月町の黒潮が迫る沿岸海域を泳ぐ魚類から磯の潮溜りに棲む無脊椎動物等、200種3,000点あまりの飼育展示を行っている。

施設規模

＜敷地面積　11,670.86㎡、建築面積　986.15㎡、延床面積　2,435.31㎡＞



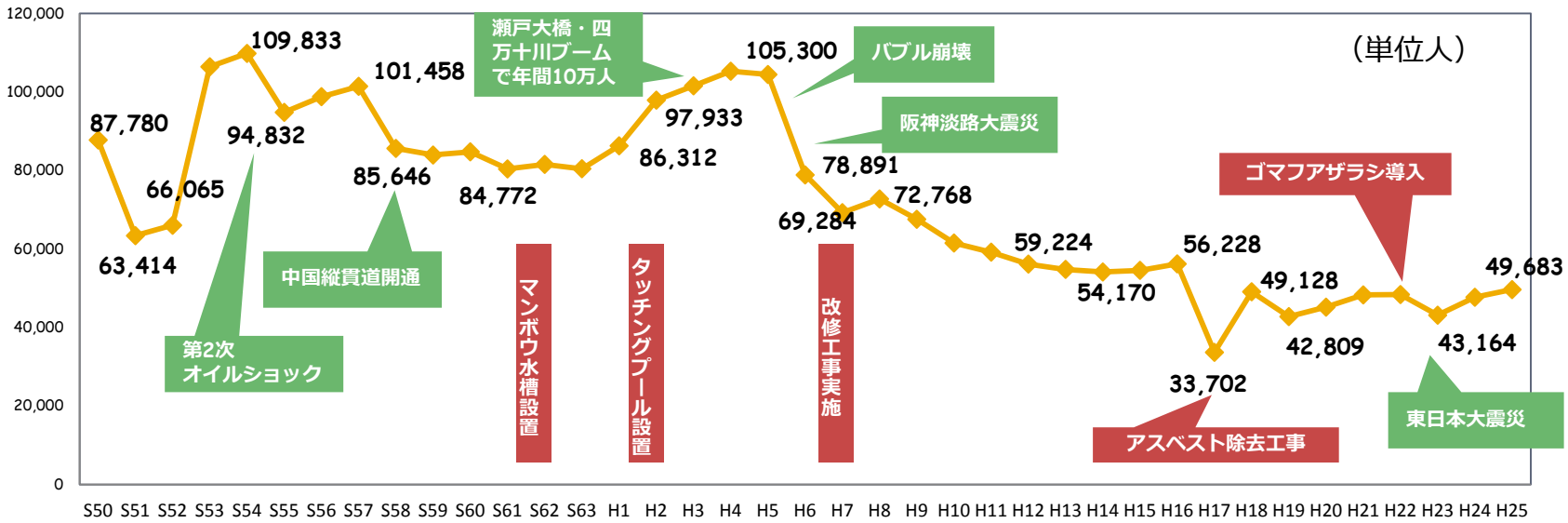


運営

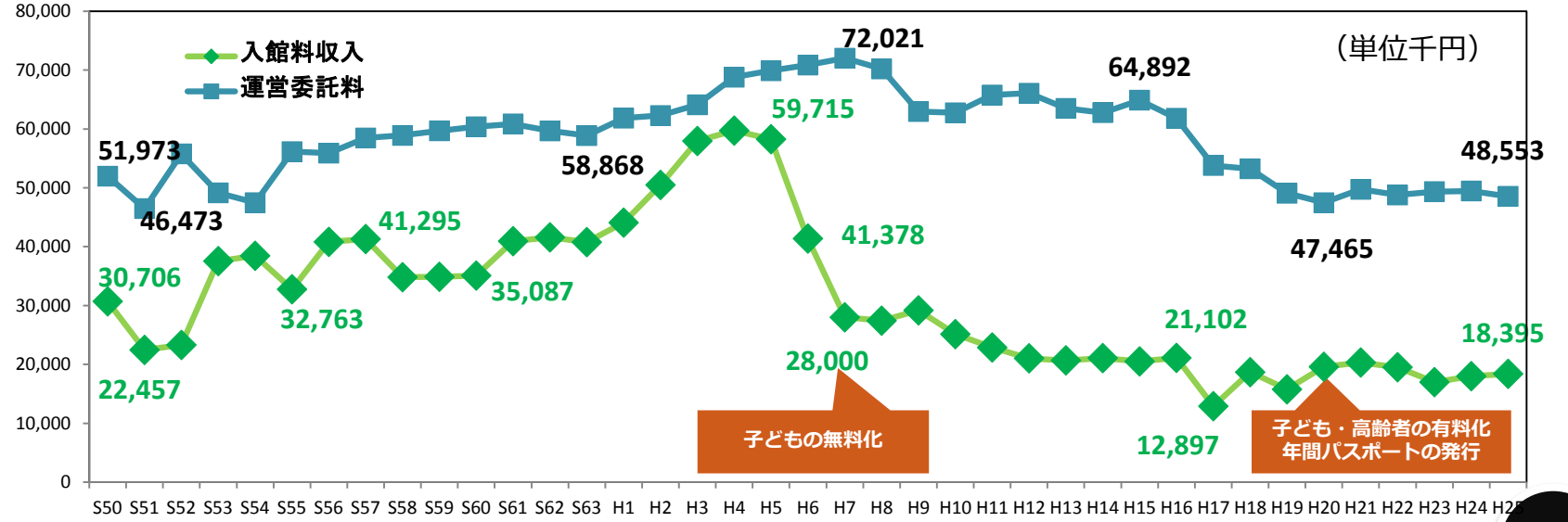
○　運営委託　㈱高知県観光開発公社
○　職員数（H26.4.1現在）
　・　館長（県非常勤職員）1名、公社職員8名（正職員6名、臨時職員2名）

2.入館者数の推移等

入館者数の推移



入館料収入等の推移



3.足摺海洋館あり方検討委員会の設置目的と検討の経過

検討委員会の設置目的

①　平成25年度に足摺海洋館の耐震調査を実施した結果、耐震性能が満たされておらず、耐震補強と地下劣化部分の改修が必要となった。
②　足摺海洋館は、昭和50年の開館以来、足摺宇和海国立公園を代表とする施設として運営してきた。この間観光拠点としての役割だけでなく、児童生徒の海洋や環境に関する学習の場としてその機能を発揮してきた。
③　耐震診断の結果を踏まえて館の改修等を実施していく上で、これまでの取り組みの検証とともに、幅広い視点から今後の館のあり方を検討する必要がある。

＜参考／耐震調査結果＞
○　本館の1～3階を6方向から耐震性能の調査を実施した結果、1～3階の本体鉄骨造部分においては、耐震性能が0.40～0.59となっており、「建築物の耐震安全性の目標」に定める、Ⅱ類の目標Ｉs値（0.75）を下回り耐震性能が満たされていない。
○　耐震補強概算工事には約5.2億円が必要

（高知県立足摺海洋館あり方検討委員会委員名簿）

団体名等	役職名	氏　名
土佐清水市	市長	泥谷　光信
（一社）土佐清水市観光協会	会長	山本　常好
特定非営利活動法人ＮＰＯ竜串観光振興会	会長	岡田　昌久
（一社）幡多広域観光協議会	代表理事	岡村　剛承
株式会社リクルートライフスタイル	事業創造部部長	沢登　次彦
株式会社海遊館	館長	西田　清徳
幡多市町村教育委員会連合会	会長	藤倉　利一
（公財）高知県観光コンベンション協会	専務理事	西尾　健一
（一社）日本旅行業協会中国四国支部高知地区委員会	委員長	野浪　　健
環境省土佐清水自然保護官事務所	自然保護官	秋山　祐貴

検討の経過

＜第1回H26.2.20＞

- 館のこれまでの取り組みや役割、竜串エリアを含む幡多観光の動きなどについてのフリーディスカッション

＜第2回H26.4.16＞

- 他の水族館の取り組み事例研究
  「新屋島水族館」
- 来館者アンケート調査の報告
- 竜串エリアのめざす姿、海洋館の基本コンセプトなどを議論

＜第3回H26.5.17＞

- 西田委員からの提案
  - 水族館のトレンド
  - 経営のあり方
  - 今後の水族館が向かうべき方向性
- 中間とりまとめ（案）に向けて
  - 施設の機能
  - 運営のあり方

＜第4回H26.7.24＞

- 最終とりまとめ
  ▼　基本コンセプト実現に向けた具体的な提案
  - 施設の機能
  - 施設の運営
  - 地域内外との協働
  - マネジメント

4.海洋館の取り組みの検証と海洋館の基本的なあり方

海洋館の必要性・あり方

- 海洋館は年間70万人の観光客が来る土佐清水市の観光の核となる施設、ここ3年間入館者も増えている状況
- 総合学習等の受け入れも進んでいる
- ビジターセンターの誘致や日本ジオパーク認定への取り組みと相まって集客が望める貴重な施設
- 海洋館も含めた竜串観光全体の底上げ、磨き上げが必要
- 館を単にリニューアルするではなく、館も含めて地域全体で集客にどうつなげるかというシナリオが必要
- 海洋館を中心としつつ竜串全体のブランド化をめざすべき
- 竜串地域の内外にあるリソースとの連携、全体のパッケージ化の中で、海洋館が地域のシンボルとなるようなコンセプトが必要
- 地域のコンセプトと館のコンセプトをどうシンクロさせるかが重要

① 地域において海洋館は必要（集客の要、教育上のシンボル）
② 竜串全体を捉えた海洋館の「あり方」の検討が必要

竜串の魅力を再構築しつつ、10年後20年後を見据えた竜串エリアのコンセプトを創る

竜串エリアのコンセプトの中での海洋館のあり方、館のコンセプトを明確にする

高知県へ

幡多地域へ

土佐清水市へ

竜串へ

地域最大の魅力を生かしつつ、全国に誇れるコンセプトを打ち立て、地域外との連携によって県全体の集客につなげる

5.竜串エリアがめざす将来像／エリアコンセプト

地域の最大の魅力

海と
海で暮らす人々

エリアコンセプト

“Sea Aquarium 竜串“（仮）／海の体験型総合レクリエーションZONE

竜串全体が大きな自然の水族館（竜串の海を五感で感じる）

- 海の歴史を感じる（歴史・文化・地形／ジオパーク）
- 海の営みを感じる（体験／グラスボート、バナナボート、シュノーケリング）
- 海の恵みを感じる（食／清水サバ、タタキ、宗田鰹）
- 海に生きる人々を感じる（地域の語り部とのコミュニケーション）

海遊館
土佐清水市観光協会
竜串観光振興会
学　校

地域の人々・事業者

環境省・観光庁

他のエリアとの連携

山
川
深海

四万十ブランド

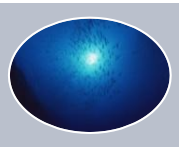
四万十トンボ公園

四万十川（川のレジャー）

黒潮・深海魚

地域内外との協働は必須

生物の多様性と環境との共生をアピール



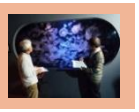
幡多広域観光協議会
学　校

エリアの人々・事業者

6.海洋館がめざす将来像／館のコンセプト

水族館に求められるもの

①「教育」「研究」「環境保全」「癒し」のバランス
② 個性（Only oneを発信）



NEXT水族館に求められるもの

① 生物（生命）の多様性を演出する場（水族館・動物園の垣根を超える）
② 持続的であること（将来まで持続可能な対策を実行）
③ 進化すること（変化する地球環境に適応すること）

エリアコンセプトの中で海洋館に求められるもの

足摺だからこそ、高知だからこそのオンリーワンを発信

“Sea Aquarium 竜串“（仮）への集客と各リソースへの送り込み／集約と波及

① “Sea Aquarium 竜串”のエントランス機能（ゲートウエイ・コンシェルジュ）
② 竜串の魅力を全てまとめて伝える機能（ビジターセンター）
③ 竜串のライフスタイルを伝える機能（地元の人々とのふれあい）
④ 海の恵みを持続的に利用（漁業関係者や学生・研究者の協力を展示に生かす）
⑤ 大学との共同研究の場

付加すべき機能

① 物販
・ オリジナルグッズ
② 飲食／fast food or café
③ 食育
・ 地元の食材を使った料理教室
（※ 物販・飲食で収入の３割という事例あり）

運営面での工夫

① 情報発信
・ 海洋館HPでエリアの遊び方を発信（2泊3日、3泊4日コースなど）
② 職員の育成
・ 水族館がサービス業であることを常に意識
・ お客様とのふれあいを大切に
③ リピーターの確保／常に変化（ソフト・サービス面）

- リニューアル直後は入館者が増えて当たり前。それ以後の落ち込みをできる限り少なくし来館者を高止まりさせる
- 収益部門の単年度黒字化をめざす（持続的であること）
- 環境の変化に対して進化を続ける水族館をめざす

「豊かな地域　竜串」の存在価値を高める

7.新たな海洋館の具体的なイメージ　その1

スタイル	フルモデルチェンジ　「海洋館が変わる、地域が変わる」
規　模	現在（延べ床面積2,435.31㎡）と同程度＋ビジター機能＋地域のエントランス機能（ジオパークセンター機能、体験型メニューのコンシェルジュ機能など）
立地場所	現在地が望ましい
ターゲット	リピーター確保の観点から子ども（小学校低学年）を中心に、季節展・特別展は大人を中心に
入館者目標	年間10万人程度（現在の2倍）
コンテンツ	《展示》 ○　地元の自然を生かした展示（展示物だけではなく地元の自然も見せる工夫） ○　魚類という枠にとらわれない生物多様性を見せる展示 ○　目玉展示で館のイメージを固定し継続することも一つのスタイル、様々な展示で違った話題を発信することも一つのスタイル、展示には現場の意見も踏まえ十分な議論が必要 ○　館を水槽で埋めつくさず、子どもが遊べ、多目的に使える空間も必要 ○　雨天時の受け入れ先として館の中にある程度のものがそろっていることが望ましい 《ビジターセンター・地域のエントランス機能》 ○　竜串地域の体験プログラムの情報を得ることができる場所に（地域の自然も含めてある程度説明ができるガイドの配置は必須） ○　グラスボートやシュノーケリングの予約、海水用具の貸し出しなど体験メニューへの誘導ができる機能 ○　海洋館に来れば竜串のすべてがそろっているという機能があれば旅行プランになる

7.新たな海洋館の具体的なイメージ　その2

コンテンツ	《学習機能など》 ○　食育に向けた子どもたちの学習の場、地元食材を使った調理実習の場 ○　大学等との共同研究の場 ○　イベント用の多目的スペース 《物販・飲食の機能》 ○　入館料以外の収入源は必要 ○　直営で物販を行う場合、竜串でしか手に入らないオリジナル商品を開発し、地域全体で販売する手法も効果的。地域全体で利益がでるような工夫が必要 ○　飲食は閑散期、繁忙期の差が激しすぎる。1年を通じて同じスタイルは無理ではないか ○　飲食はカフェ、ファストフードで止めてはどうか ○　物販や飲食の機能が新たに開発されることにより地域にも相乗効果が期待できる ○　期間限定で地元のグルメを提供すれば十分な旅行商品になる 《ソフト施策》 ○　エリア内の様々な施設、体験メニューに使えるパスポート（クーポン）制度の導入
運　営 地域内外との協働	○　地域全体をプロデュースする人材が必要 ○　水族館運営のプロと経営面でのプロの両方が必要 ○　学習や研究機能など、公共性も有しており全てが収益で賄えるものではない ○　維持管理には地域の力だけでは難しく、民間の強い力も必要 ○　中長期的な運営・予算計画が必要 ○　体験型観光へのエントランス機能を発揮するため、土佐清水市、土佐清水市観光協会、竜串観光振興会が一体となってサポートすることが必要 ○　土佐清水市内の民間の観光事業者との協働も不可欠 ○　日本ジオパーク認定に向けた近隣自治体との連携

エリアコンセプト実現のためのポイント

エリア全体のマネジメントをする人材

施設の機能と運営　連携・協働　地域内外のリソース

8.全体の展開イメージ

“Sea Aquarium 竜串“（仮）／海の体験型総合レクリエーションZONE
① “Sea Aquarium 竜串”（仮）のエントランス機能・ビジター機能
② 竜串の魅力を全てまとめて伝える機能
③ 竜串のライフスタイルを伝える機能
④ 生物の多様性を演出
⑤ 海の恵みを持続的に利用（漁業関係者や学生・研究者の協力を展示に生かす）
⑥ 大学との共同研究の場
⑦ 食育の場
⑧ 物販・飲食の機能
集約と波及
エントランス
&
ナビゲーション機能
西の川
三崎小
足摺海洋館
足摺海底館
竜串海中
公園
コンシェルジュ
が誘導・案内
コンシェルジュ
が誘導・案内
三崎港
下川口小
下川口
郵便局
千尋岬
千尋岬の
化石連痕
残し
明神鼻
砥崎
山
川
深海
他のゾーンとの連携